

## 高等師範学校・東京高等師範学校による 学校体育の近代化とスポーツの普及に関する研究

大熊 廣明・阿部 生雄・真田 久  
岡出 美則・長谷川悦示

### A study on the modernization of school physical education and the spread of sports by Tokyo Higher Normal School in Japan

OHKUMA Hiroaki, ABE Ikuo, SANADA Hisashi  
OKADE Yoshinori, HASEGAWA Etsushi

#### ・高等師範学校・東京高等師範学校における体 育教員養成

##### 1. 高等師範学校・東京高等師範学校における体 操専修科の開設

明治 20 年代の半ば過ぎから中等教育機関への進学熱が高まり、学校数、在学者数共に増加しはじめた。中等学校生徒の増加に伴う教員不足に対処するため、文部省は明治 27 年 4 月に定めた「高等師範学校規程<sup>1)</sup>」の第 12 条で、「尋常師範学校尋常中学校ノ教員ノ欠乏ヲ充タス為ニ特別ノ必要アル場合ニ於テハ専修科ヲ置クコトヲ得」と規定した。これを受けて同年、高等師範学校の規則<sup>2)</sup>も改定され、その第 8 章第 43 条で「尋常師範学校尋常中学校教員ノ欠乏ヲ充タスタメニ特別ノ必要アル場合ニ於テハ専修科ヲ置クコトアルヘシ」と定められた。この規則に基づき、明治 28 年 4 月の国語漢文科の設置から昭和 6 年 4 月の図画手工科の設置まで、延べ 41 の専修科が設置された。そのうち体操科関係の専修科は、以下に述べるように 8 回開設された<sup>3)</sup>。

##### 1) 体操科

明治 32 年 4 月、官費により手工科、物理学化学科、動物学植物学科及び農学地学科と共に開設された。定員は 30 名で、当初の修業年限は 2 年 1 学期であったが<sup>4)</sup>、明治 33 年 1 月に規則が改定され、2 年に短縮された<sup>5)</sup>。学科目として倫理、教育学、国語、生理衛生、普通体操、兵式体操が課された<sup>6)</sup>。

##### 2) 修身体操専修科

官費によるもので、修業年限は明治 35 年 9 月から同 38 年 3 月に至る 2 年 2 学期であった。前回開設の「体操科」に比べ期間が二学期間延長された。また、学科目として漢文、英語、音楽が加えられ、その程度も示されるようになった<sup>7)</sup>。

##### 3) 文科兼修体操専修科

この専修科は、明治 39 年 4 月、同 40 年 4 月、同 42 年 4 月及び同 44 年 4 月の 4 回開設された。第 1 回は官費で修業年限 3 年だったが、第 2 回からは私費で修業年限 4 年となった。定員は明治 42 年入学までは約 35 名で、44 年は約 30 名であった。学科目については、倫理、教育、体操、生理衛生を主要科目とし、それに兼修科目として本科国語漢文部と同一程度の国語漢文、本科英語部と同一程度の英語、本科地理歴史部と同一程度の地理歴史の 3 種のうちの 1 種が課された<sup>8)</sup>。

##### 4) 体操専修科

この専修科は大正 2 年 4 月と同 3 年 4 月に開設された。いずれも私費で、修業年限は 3 年、定員は約 60 名であった<sup>9)</sup>。この専修科の特徴は、兼修がなくなったことと、柔道と剣道が学科目として掲げられ、専攻にも体操と並んで登場したことである。武道に関しては、明治 44 年 7 月 31 日、「中学校令施行規則」の一部が改定され、「体操ハ教練及体操ヲ授クヘシ。マタ、擊劍及柔術ヲ加フルコトヲ得」となったことを反映するものであった<sup>10)</sup>。武道の正課採用が認められたことにより、武道教

表1 体操専修科学科目及毎週授業時間（大正3年4月定）

学年別 専修 科目 学科学目	第1学年			第2学年			第3学年(第1、第2学期)		
	体操を主とする者	柔道を主とする者	剣道を主とする者	体操を主とする者	柔道を主とする者	剣道を主とする者	体操を主とする者	柔道を主とする者	剣道を主とする者
修身	3	3	3	3	3	3	4	4	4
教育	3	3	3	3	3	3	3	3	3
体育理論	2	2	2	2	2	2	2	2	2
体操	12	4	4	12	4	4	12	4	4
柔道	5	13	—	5	13	—	5	13	—
剣道		—	13		—	13		—	13
生理衛生	2	2	2	2	2	2	4	4	4
国語及漢文	4	4	4	4	4	4	2	2	2
英語	3	3	3	3	3	3	3	3	3
計	34	34	34	34	34	34	35	35	35

本表の外第1学年夏季に於て一箇月間游泳を課す

第3学年第3学期に於ては体操柔道剣道及授業練習を課す

体操を主とするものには柔道及剣道は其の一を課す

体操、柔道及剣道の授業時数は時宜により増減することあるべし

(東京高等師範学校一覧、白大正3年4月至大正4年3月、大正3年7月、86~87頁)

表2 体操専修科卒業生の状況

	師範学校	中学校	高等 女学校	実業学校	その他	合計
体操科(明治34年卒)	12	8	1	—	1	22
修身体操専修科(明治38年卒)	3	12	—	—	—	15
文科兼修体操専修科(明治42年卒)	10	16	—	2	7	35
文科兼修体操専修科(明治44年卒)	6	5	1	—	4	16
文科兼修体操専修科(大正2年卒)	10	7	—	—	1	18
文科兼修体操専修科(大正4年卒)	5	4	1	1	1	12
体操専修科(大正5年卒)	6	20	—	4	7	37
体操専修科(大正6年卒)	16	16	—	—	7	39
体操専修科(大正7年卒)	1	3	—	1	1	6
合計	69	91	3	8	29	200

『東京高等師範学校一覧』(明治34年~大正7年)より作成。

師の資格や有資格教師の養成が緊急な問題となったのである<sup>11</sup>。この専攻を体操、柔道、剣道の三つに分けた点は、次期の「特科としての体育科」につながるものであった。

#### 5) 体操専修科卒業生の状況

体操専修科は大正7年に最後の卒業生を出してその役割を終えることになった。この間の卒業生はちょうど200名である。彼らの卒業直後の勤務校を学校種別にまとめたものが表2である。師範学校と中学校の教員が全体の80パーセントを占

め、高等女学校と実業学校を合わせると 86 パーセントに達する。さらに、「その他」に分類した中には 12 名の本校研究科生が含まれており、彼らの中には後に中等学校の教員になった者もいると思われるので、卒業後中等学校の教員になった割合はさらに高かったといえる。

## 2. 東京高等師範学校体育科の開設

### 1) 特科としての体育科の開設

#### (1) 開設の経緯及び目的

大正 4 年 2 月、文部省令<sup>12</sup>を以て「高等師範学校規程」が改定され、これに基づき「東京高等師範学校規則<sup>13</sup>」も改定された。同規則は第 2 条で、「学科ヲ分チテ文科理科トシ更ニ分チテ各三部トス前項学科ノ外特科トシテ体育科ヲ置ク」と規定し、ここに「特科としての体育科」が開設されることになった。この「特科としての体育科」は、「本校ハ師範学校中学校高等女学校ノ学校長及教員タルヘキ者ヲ養成シ兼ネテ普通教育ノ方法ヲ研究スルヲ以テ目的トス」という同規則第 1 条の趣旨の下に設置されたわけであるから、「専修科規定」によって教員の欠乏を充たす必要がある場合に臨時的に設置された「体操専修科」とは、その性格を異にするものであった。

また、修業年限は第 5 条で「文科理科体育科ハ各四箇年トシ内一箇年ヲ予科トス」と定められ、

修身	実践倫理、倫理学、国民道徳論、西洋倫理学史、道徳史、東洋倫理学史
教育学	教育学、教育史、教授法、学校衛生、教育法令
体操教練及競技	体操、教練及競技
柔道	柔道総論、柔道各論、形、乱捕、問答、教授法
剣道	剣道総論、剣道各論、形、試合、問答、教授法
体育理論	体育理論
解剖生理衛生及救急療法	解剖学、生理学、衛生学、救急療法
心理学及論理学	論理学、心理学
国語及漢文	講読、文法、作文
英語	講読、文法
歴史	国史、東洋史、西洋史
随意科目	英語

#### (3) 大正 7 年 5 月改定の学科目、学科課程及每週授業時数

大正 7 年 5 月に生物学が加えられる一方、随意科目がなくなった。その結果、学科目は「解剖生理衛生及救急療法」が「生物学解剖生理衛生及救

体操専修科当時の 3 年から文科、理科と同じ 4 年に延長された。このことは、制度的には体育科が文科、理科とほぼ同格の存在になったということであり、体操科教員養成のカリキュラムの充実を含めて、体操伝習所以来中断されていた本格的な体操科教員養成並びに体育研究の再開を意味していた。

しかしながら、開設当初においては「特科トシテ」という文言の中に体操専修科的性格を残していたことも事実であった。それは大正 4 年に予科に 16 名が入学し、翌年第 1 学年に 14 名が入学した後、大正 5 年、6 年の 2 年間、予科の募集が行われなかったことに表われている。生徒が毎年入学するようになるのは、大正 7 年以降のことであった。

#### (2) 学科目とその程度

学科目については第 3 条で「体育科ノ学科目ハ修身、教育学、体操教練及競技、柔道、剣道、体育理論、解剖生理衛生及救急療法、心理学及論理学、国語及漢文、英語、歴史トシテ体操教練及競技、柔道及剣道ハ其一ヲ主トセシム 但シ随意科目トシテ英語ヲ課ス」と規定された。「体操専修科」にはなかった学科目として、「心理学及論理学」と「歴史」が加えられた。学科目の程度は次のようであった。(第 10 条)

急療法」となり、「但シ随意科目トシテ英語ヲ課ス」が削除された。

### 2) 本科としての体育科の開設

#### (1) 開設の経緯

大正 10 年 2 月、文部省令を以て「高等師範学校

表3 各学年の学科課程及毎週授業時数 (大正7年5月改正)

計	歴史	英語	漢語及文	論理學	心理學及衛生學	體育理論	劍道	柔道	體操及技藝	教育學	修身	學年		學科
												學科日數	及週時數	
三三三	三	五	四	二	四		四	九	二	二	二	甲組	每週時數	豫
												乙組	二	
												丙組		
三三三	國史	講義、文法	講義、文法、作文	論理學	生理學、衛生學	形、試合	形、柔道、劍道、體操	體操及技藝	實踐倫理	學科課程	甲組	每週時數	本科第一學年	
三三三	二	二	四	二	二	二	四	九	二	四	乙組			
三三三	二	二	四	二	二	二	一〇	四	二	四	丙組			
三三三	東洋史	講義	講義	心理學	生理學	體育理論	試合、形、柔道、劍道、體操	體操及技藝	教育學	倫理學	實踐倫理	甲組	每週時數	本科第二學年
三三三	三	二	二	四	二	二	四	九	三	四	乙組			
三三三	三	二	二	四	二	二	一〇	三	三	四	丙組			
二二九	西洋史	講義	講義	衛生學	體育理論	試合、形、柔道、劍道、體操	體操及技藝	教育學	史、西洋倫理學	國民道徳論	甲組	每週時數	本科第三學年	
二二九				四	二	四	九	五	五	五	乙組			
二二九				四	二	一〇	三	五	五	五	丙組			
二二九				四	二	一〇	九				甲組	每週時數	本科第三學年	
						一〇					乙組			
											丙組			
				衛生學	一般倫理學	體育理論	試合、形、問答、亂答、教授法	體操及技藝	教育學、衛生學	道徳史、東洋倫理學	學科課程			

(一) 甲組の普通、乙組の普通、丙組の普通ヲ主トスルモノトス  
 (二) 第三學年第三學期ニ於テハ本表ノ外授業課程ヲ講ス  
 (三) 本表ノ外他學年ニ於テ一ヶ月間修業ヲ講ス

規程<sup>15</sup>」が改定され、第1条中の「特科トシテ」が削除された。これを受けて同年4月「東京高等師範学校規則」第2条も改定され、「学科ヲ分チテ文科理科トシ更ニ分チテ各三部トス 前項ノ外体育科ヲ置ク<sup>16</sup>」とされた。これによって従来体育科の前に付されていた「特科トシテ」という文言がなくなり、体育科を特科としていた制度はこれ以後廃止されることになった。

体育科の学科目及びその程度、課程、毎週授業時間割等は、「特科としての体育科」のものと同様と変わるところはなかったが、制度的にはより確かな存在になったということができよう。

(2) 大正15年10月の規則改定

大正15年10月に「東京高等師範学校規則<sup>17</sup>」が改正され、修業年限4年の内最初の1年を予科、残りを本科第1学年～第3学年としていたのを改め、第1学年～第4学年とした。

体育科の学科目も若干変わり、「体操教練及競技」が「体操競技及教練」となった。また、「歴史」

がなくなり、随意科目として「独語」が課されることになった。

(3) 昭和7年の改定

この年の「東京高等師範学校規則<sup>18</sup>」の改定で、体育科の学科目は大きく変わることになった。変更の主な内容は次のとおりである。

- ・「公民科」が新たに設けられた。
- ・「体操競技及教練」が「体操」、「遊戯及競技」、「教練」の三つの学科目に分かれた。
- ・「柔道」が「柔道」、「柔道理論」に分かれた。
- ・「剣道」が「剣道」、「剣道理論」に分かれた。
- ・「歴史」が復活した。
- ・「随意科目」として独語の外に英語も加えられた。

なお、学科目の程度は次のように定められた。

修 身	国民道德原論、倫理学、国民道德史、社会倫理
教 育 学	日本教育史、西洋教育史、教育学、教授法、教育法令、学校衛生
心理学及論理学	心理学、教育的心理学、論理学
公 民 科	公民生活概説
体 操	体操
遊 戯 及 競 技	遊戯、競技
体 育 理 論	体育史、体育総論、体育行政
教 練	教練
柔 道	基本練習、形、乱捕、試合
柔 道 理 論	柔道理論、技術各論、柔道史、柔道教授法
劍 道	基本練習、形、地稽古、試合
劍 道 理 論	剣道理論、技術各論、剣道史、剣道教授法
生物学解剖学生理学衛生学及救急療法	生物学通論、解剖及組織学、生理及生化学、衛生学、一般病理学、救急療法
国 語 及 漢 文	講読、作文
英 語	講読、文法
歴 史	国史
随 意 科 目	独語、英語

(4) 昭和15年の改定

昭和15年の「東京高等師範学校規則<sup>19</sup>」改定で、「学科ヲ分カチテ文科理科トシ更ニ分チテ文科ヲ五部理科ヲ三部トス 前項学科ノ外体育科ヲ置キ之ヲ分ナチ三部トス」(第2条)と定められた。これは従来からあった甲、乙、丙の別を第一部、第

二部、第三部と改め、規則の上に明記したものであった。

これに伴い、学科目とその程度、学科課程及び毎週授業時数も各部別に示されることになった。

(第10条、第11条)それらは次に示すとおりであるが、内容的には昭和7年のものとほぼ同じで

あった。

3) 戦時下における体育科の改変

(1) 師範教育令改定前の体育科

昭和 16 年 10 月、勅令で修業年限が短縮され、東京高等師範学校でも臨時規則で学年、学期、休業日等が変更された。しかしながら、学科目等に戦争の影響が表われるのはもう少しあとになってからである。体育科の場合、昭和 17 年に学科目とその程度、課程及毎週授業時間数が改定されたが、主な改定点は、「心理学及論理学」が「心理学」と「論理学及哲学」になったこと、「英語」と「随意科目」の独語、英語がなくなり、「外国語」として英語、独語が示されたこと、そして各学科目の程度に若干の変化が見られることである。戦争の影響と思われる顕著な変化は、この改定においては認められない。

(2) 師範教育令改定以後の体育科

昭和 18 年 3 月 6 日、師範教育令が改定され、同年 3 月 8 日に高等師範学校及女子高等師範学校規程が定められた。これを受けて体育科の学科目も

改定され、修練と銃剣道が加えられるなど、戦争の影響が表われるようになった。

4) 体育科卒業生の進路

表 4 は、年度別の体育科卒業生の進路を示したものである。史的に明らかになるのは昭和 16 年度までである。

昭和 11 年度卒業生の進路の内訳は不明なため、この年度を除いた場合、教員になった者は 710 名で、不明および死亡を除いた全体の約 83% を占めている。特にその中でも、中学校の教員になった者が 330 名で、教員全体の 46.5% といちばん多く、次いで師範学校・女子師範学校の 135 名、19.0%、高等女学校 88 名、12.4%、実業学校 62 名、8.7% と続いている。これら中等学校の合計は教員全体の 86.6% を占めており、東京高等師範学校の体育科が中等学校の体育教員養成機関であったことを改めて示すものとなっている。

なお、体育運動主事になった者も 28 名おり、彼らは府県の体育行政に重要な役割を果たした。また、昭和 4 年に東京文理科大学が設置されてから

表 4 東京高等師範学校体育科卒業後の進路

教 員	大正 7 年度	8 年度	9 年度	10 年度	11 年度	12 年度	13 年度	14 年度	15 年度	昭和 2 年度											計					
										2 年度	3 年度	4 年度	5 年度	6 年度	7 年度	8 年度	9 年度	10 年度	11 年度	12 年度		13 年度	14 年度	15 年度	16 年度	
高 等 学 校	2			1	1	1		1	2															13		
高等師範・女子高等師範	3			3	2			1	1																19	
中 学 校	1			7	3	6	4	9	8	10	11	14	22	25	38	18	20	20							330	
高 等 女 学 校	1			3		1	3		5	2	3	2	4	6	13	3	2	7							88	
師範学校・立学師範	1			1	1	1	3	5	5	3	4	9	13	5	8	7	14	5							135	
専 門 学 校				4		1	1		1			2		2			1								14	
実 業 学 校	1			2	3	1	1	1	1	3	2	2	2	2	2	4	7	2							62	
小 学 校				3	1			2	2	3	1		1	1		4	1	2							30	
東 京 文 理 大								1	1																4	
そ の 他 の 学 校								1	2																18	
體 育 科 進 路																										
体育運動主事	3			2	5	5	1	3			3	2		1	1		1								28	
教 員				1	1	1								2	2										8	
体育研究員									1																1	
官 公 家						4			1	2		1	1												10	
企 社 業				1	1	1		1				1													5	
廣 告 関 係																									6	
そ の 他						1		1	1																3	
進 学																										
東 京 文 理 大								1					1	3	3	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	48
そ の 他																										7
入 費																										36
不 明	1			1	4	4	1	2	1	4	4	1	2	2	4	4	8	7								109
死 亡	2			5	1	8		2	3	1			2	1	2	1										28
計	23			34	23	33	20	21	20	47	34	38	60	58	61	55	61	55	54	38	44	68	64	78	1,045	

1. 大正 7 年度卒業（大正 8 年 3 月）から昭和 10 年度卒業（昭和 11 年 3 月卒業）までの卒業後の進路は、「東京文理科大学 東京高等師範学校一覧 昭和 11 年度」に基づいている。  
 2. 昭和 11 年の内訳が不明なため、進路別の合計が 1,045 名とはなっていない。

は、同大学に進学する者も多くなった。

## ・高等師範学校・東京高等師範学校のスポーツ

### 1. 校友会の結成とスポーツ活動

#### 1) 初期のスポーツ活動

東京師範学校及び高等師範学校（東京高等師範学校）は、スポーツの面でも先駆的な役割を担った。スポーツは、舎監でもあった坪井玄道と嘉納治五郎校長の力に負うところが大きかった。

1883（明治16）年6月号の茗溪会雑誌には次のような記述がある。「体育の必要なるは今更喋々をまたず、既に東京師範学校・同女子師範学校・学習院等にては、各種の方法を以て体操術を練習せり。即ち徒手運動・機械運動（啞鈴・球竿・棍棒・木環）あり、此の他、東京師範学校に於いては茗溪（神田川）に二艘の端艇を繋ぎおき、土曜日曜などには之を師範学校生徒に貸与して墨田川に出で、行舟術をなさしめらる、といふ。此の術は筋力を強壯にするは勿論、意気を爽快にすること最も多ければ、夙夜に勤学する者には甚だ有益なるべし」と。この2艘のボートは「我が国ボートの始」と自負され「都下諸学校に大なる刺激を与へ」たと言われる<sup>20</sup>。

テニスは1878（明治11）年頃に体操伝習所教官となったリーランドによって導入されたと言われるが、東京師範学校では1883から1884年頃坪井の指導の下で行われており、ラケットやコートが既に備えられていた。他にもベースボール、弓術、撃剣の器具が備えられ、希望者に貸し出されていた。

#### 2) 運動会の設立

「森有禮の監督たりし頃より、東京高等師範生徒は特に体操を重んじたけれども、その他の運動につきては概して冷淡なりし<sup>21</sup>」と言われたが、嘉納治五郎校長の時代には様々なスポーツが盛んになり始めた。運動会は寄合会から独立して1896（明治29）年3月に設立された。当初は柔道部、撃剣銃槍部、弓技部、器械体操及び相撲部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部の10部が存在し、生徒はその一部または数部に属し、毎日30分以上必ず所属部の運動をなす事が規定されていた。10月には自転車部が加えられた。運動会はまた、毎年数回の遠足会、一回の大運動会及び、臨時の水泳漕櫓を行うことを規定した。この頃から運動部意識が芽生え始めた。なお、大運

動会は1894（明治27）年秋に初めて開催され、右尚館前の広場に縄を張って、競走、フットボール、三人抜相撲、撃剣、綱引、剣舞等20数種目の競技が行われた。また、1898（明治31）年にはお茶の水から池上本願寺までの各級健脚競走を行ったが、これがその後永く続く東京高等師範伝統の長距離競走の始まりであった。

#### 3) 校友会の結成

運動会の活動は年々拡大し、年度予算も拡大した。また1898（明治31）年から1903年にかけて、学内に倫理学会、地理歴史学会、英語学会、博物学会等の学生団体が生まれるなど、課外活動は急速な成長を遂げた。このような動向の中で、1901（明治34）年5月、松陰神社への遠足会を催した折りに、嘉納校長から校友会組織を創りたいという話があり、生徒の賛同をもって同年10月に寄合会と運動会を統合した校友会が結成された。校友会は目的を「精神ノ修養及び身体ノ鍛練ヲ計り兼テ会員相互ノ親睦ヲ厚クスル」と定めた。校友会は談話部会と運動部会の二部会を設け、前者には談話部と雑誌部の二つの支部が、後者には柔道部、撃剣及び銃槍部、弓技部、器械体操部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部、ボート部、自転車部、角力部、翌年には徒歩部と游泳部が設けられた。1903（明治36）年の改正では、談話部会と運動部会の二大別が廃止され、自転車部、器械体操部、角力部が削られ運動部は9部となった。

#### 4) 体育科の開設と校友会運動部

高等師範においては前述のように、体操科教員養成のため、1899（明治32）年から1914（大正3）年まで体操専修科が開設されたが、特に1906（明39）年の文科兼体操専修科の開設は、校友会運動部の活動に大きな影響を及ぼすことになった。更に、1915（大正4）年に開設された特科としての体育科、及びその後の体育科への改組は、この傾向を確実なものとした。同年寄宿舎は校友会各部本位の編成に改められ、校友会各部及びこれに準ずる部に分けられることとなった。このことは各部の結束を強め、その活動をより特色のあるものにした。

東京高等師範に体育科が設置された大正期のスポーツ界は、大日本体育協会を足場に、組織・技術両面で改善が図られ、極東選手権大会等の国際的な競技会が開催されると同時に、国内においても各種目の全日本競技会が開催され、充実してい

った。運動部は従来9部であったが、運動熱の高潮と新種目の勃興、生徒数の増加に伴い、器械体操、射撃、ラ式蹴球、籠球、卓球、排球、山岳、送球も組織された。

#### 5) 大塚学友会の運動部

校友会は、1929(昭和4)年4月東京文理科大学が開設されるに伴い、大塚学友会と改称し、東京文理科大学、東京高等師範学校及び第一臨時教員養成所の職員及び学生・生徒によって組織され、その内容の充実を図った。この結果、雑誌部・校友会誌を廃し、代わるべきものとして、新たに学芸部、会報部を設け、学芸部より『学芸』、会報部より『大塚学友会会報』を発行することとなった。

### 2. 各運動部の設立と発展

#### 1) 柔道

柔道部の起源は1894(明治27)年、嘉納校長の指導の下で、十数名の者が右尚館の隣の薬局に畳を敷いて行ったのが始まりとされる。他に講道館の小田勝太郎三段、千葉兵藏二段らが指導に当たった。間もなく、右尚館に稽古場が整備され、1896(明治29)年には横山作次郎が指導に当り、技術の成績によって級を定める方式で稽古が行われた<sup>22</sup>。柔道部は、1908(明治41)年に柔剣道のいずれかを新入生の選択必修としたことにより発展していく。50人程度の部員は、同年以後常時110余名と倍増した。最初の対外試合は1902(明治35)年に大塚新校舎柔道場が落成し、東京の各専門学校学生を招待して举行された第1回柔道大会であった。講道館の紅白勝負、他学校の招待柔道会などが他の主な試合であった。年中行事的活動としては、寒稽古と暑中稽古があり、いずれも1ヶ月にわたり、寒稽古は高師道場にて、暑中稽古は講道館において行われた。競技力向上については、1906(明治39)年に始まる文科兼修体操専修科生の入学が大きく関係した。その入学生の中には、柔道の経験者が多数含まれていた<sup>23</sup>。1914(大正3)年に行った慶應大学との試合は、対抗試合のない当時、大きな刺激を与えた。東京高等師範の卒業生は大部分が全国の中等学校の教員に赴任したので、柔道の素養をもつ教員の着任は、柔道の普及につながった。柔道経験を有する教員の全国派遣の成果は、全国中等学校柔道優勝大会の主催となってあらわれた。柔道部は中等学校の柔道大会を主催したにとどまらず、1921(大正10)年頃から全国の中等学校生を対象とする夏季講習会を開

催した。柔道部の実力は専修科時代にその礎が築かれたものであったが、その上に永続的発展のレールを敷いたのは1915(大正4)年に開設された特科体育科であった。柔道専攻生の開始である。この頃には岡部平太、曾田彦一らが活躍し全盛を示した<sup>24</sup>。明治神宮体育大会柔道選手権大会においては東京高等師範卒業生の櫻庭武、工藤一三、小谷澄之、阿部信文が優勝した。

#### 2) 撃剣銃槍(剣道)

東京高等師範で剣道が生徒の間で行われ始めたのは峰岸米造教授の在学中であった。寄合会の記録にも撃剣銃槍部が見られ、日清戦争頃から盛り上がった武士道復古の気運と呼応して、次第に組織化された。1898(明治31)年には講武所で名声の高かった木村敷秀を招き、峰岸部長と共に部の基礎が築かれた。校友会設立後の1902(明治35)年には部員数は100人に及び、両組の色で等級を分け、300円を投じて道具50式を備えていた<sup>25</sup>。通常の試合としては、校内で行う春季の紅白勝負、秋の剣道大会、他大学で開催される剣道大会などであった。年中行事的活動としては、寒稽古がある。永楽町の寄宿舎では道場がなかったため、戸外に霜を踏んで行った。文科兼修体操専修科生の入学とともに、競技力が向上し、優秀な剣士を輩出し、強豪を誇った。

1915(大正4)年の特科体育科の開設に伴う剣道専攻生の登場は、その発展を永続的なものとした。東京高等師範の剣道が一躍剣道界で注目されるようになったのは、高野佐三郎範土を招いたときからである<sup>26</sup>。剣道部は1920(大正9)年以来東京高等師範において全国中等学校大会を開催し、1926(大正15)年頃より剣道関係者の剣道講習会を開催するなど、剣道の普及にも尽力した。大正、昭和戦前期において、部員は明治神宮大会、全日本学生剣道連盟優勝試合等の大会において活躍した。

#### 3) 弓技(弓道)

弓は桜井寅之助の回想によれば、1892(明治25)年頃に数人の学生がお茶の水の寄宿舎の矢場で行っていた。1896(明治29)年の運動会の設立、1901年の校友会の設立にも弓技部としてその名を連ねたが、組織化されたものではなかった。1905年になると移転して間もない大塚の地に弓技場が新設され10月には第1回競射会が開かれ30人の射手を確保した。初期の師範は日置流の織田重信、後

に高等商業学校の師範でもあった窪田藤信で、弓技部の再興に貢献した。部長は坪井玄道、中島信虎らが務めた。春秋二期に競射会を行うことは1906年から始められた。1908年からは真宗大学との春秋2回の試合が定期化し、校外試合が始められた。1910年には本館前に道場が新築され、道場開き及び秋期大会が挙行された。この年寒稽古が開始された。1912年に開かれた校友会評議会において弓技部の名は弓道部と改められた<sup>27</sup>。1913年頃には都下の各学校で弓術大会が活発化し、東京高等師範に対し選手派遣の依頼が相次いだ。

大正期に入ると対外試合が活発化する。慶應義塾大学、宗教大学（現・大正大学）等の大会に参加し、東洋協会植民専門学校などと競射を行っている。また、1917（大正6）年には一高との対戦が定期化している。1924年頃には実力を蓄え、都下大学専門学校の弓道リーグ戦では準優勝した。1926年には夏の京都遠征も定例化し、明治神宮大会の予選にも出場している。以後も1932（昭和7）年の日本学士弓道連盟選手権大会に優勝するなどその実力を保った。校友会誌第91号にはその頃の流儀が尾州竹林派の流れを汲むもので本多流であること、それが当時師範であった本多利時の祖父利實が工夫したものであることなどが述べられている。1935（昭和10）年には、本多流を学ぶ5校で争覇戦が行われた<sup>28</sup>。

#### 4) 徒歩（陸上競技）

1898（明治31）年第1回長距離競走が行われたが、第2回は1901（明治34）年大宮氷川公園で行われた。1904年以後は従来の秋の遠足会を徒歩競走に改め、1908年には春の遠足会をも徒歩競走とし、以後春秋に玉川、大宮等への長距離走が定着した。当時は全校生徒が参加する学校行事であった。また1901年以来校友会は全国中学校師範学校選手競走を組織し、優勝旗を設けて参加を奨励したことから、20数校が参加した。1913年からは大塚板橋間往復長距離競走も加わった。嘉納治五郎校長が徒歩主義を奨励したことから、徒歩部の活動は活発化した。1906（明治39）年には生徒有志が歩行術研究会を作り、1907（明治40）年頃には次第に組織的な選手養成に取り組み始めた。東京高等師範の選手は練習を組織的永続的なものにし、帝国大学や一高等の運動会で好成绩を示すようになった。1909年には神戸大阪間マラソンで菅野新七が入賞した。この時得た優勝旗は本部に寄贈さ

れ、春秋の長距離走の優勝者に授与することになった。1911（明治44）年の国際オリンピック競技会派遣選手予選会では、金栗四三、橋本三郎、野口原三郎がマラソンに出場し上位を占めた。この結果、1912年、金栗選手は帝大の三島禰彦選手と共に、わが国最初のオリンピック代表選手としてストックホルムでの第5回オリンピック大会に参加した<sup>29</sup>。

1915年以後数年間は優秀な選手を輩出し、全国長距離走界を独占した観があった。短距離走、他競技一般についても、この頃から成績が向上した。多久儀四郎は第2回極東選手権大会の長距離走及び800m競走に1位となった。1917（大正6）年に開催された遷都五十年記念東海道駅伝競走では関東の主力をなし関西方を破り、芝浦開催の極東オリンピック大会にもおもて東京高等師範は活躍した。1920（大正9）年の第1回箱根駅伝は東京高等師範、早大、慶大、明大の4校で争われ、東京高等師範が優勝した。同年のアントワープ・オリンピックの日本代表には東京高等師範から5選手が選ばれ参加した。1924年のパリオリンピック大会にも選手として納戸徳重、上田精一、金栗四三が派遣された。国内でも1926年の東西対抗競技会、全日本選手権大会において、福井打雄、尾崎剛毅が優勝するなど、立派な成績を収めている。この頃帝国大学との定期戦が開始された。昭和に入っても競技部（1922年頃から校友会誌では徒歩部に替わって競技部が用いられている）の活躍は続く。1930年の日独対抗陸上競技会、東京で開催された極東オリンピック大会、ドイツで開催された世界学生オリンピック大会では木内清、菅沼昇、吉岡隆徳などが活躍し、1931年の全日本学生陸上競技対抗選手権大会では早稲田大学を破って、優勝するに至った。

#### 5) 庭球（テニス）

庭球部史を書いた稲葉三郎は「本校に庭球の行はるるに至りしは実に坪井先生洋行の当時海外よりもたらし帰られて東京高等師範に紹介せられたるに始まる」と述べている。また、『東京高等師範学校庭球沿革史』で児島献吉郎は「過去の歴史は蓋し我校の庭球が日本庭球史上に特筆大書すべき不朽の名誉を保持せるに如かざるべし。回顧すれば庭球の始めて我国に伝播せしは明治十一年頃に在りき<sup>30</sup>」とし、リーランドが来日から導入したことを記している。前者では庭球の組織化は1902

(明治 35) 年の坪井の留学からの帰朝に、後者では体操伝習所設立時の 1878 (明治 11) 年にリーランドが米国から導入したことになる。いずれにせよ、明治時代にテニスをしてきた人々にとって、ローンテニスの導入と組織化は坪井と東京高等師範の脈絡の中で捉えられていた。しかし、わが国で最初にテニスの対抗戦が行われたのは 1898 (明治 31) 年で、坪井の帰朝以前にテニスが組織化を遂げていたことが理解できる。最初の対校戦は、当時お茶の水にあった東京高等師範と神田一橋の高等商業との間で行われた。以後この対抗戦は定期化し、今日に及んでいる。当時のローンテニス部はテニスを普及する上で極めて重要な活動を行った。1902 (明治 35) 年 4 月には京阪地方にテニスを紹介するためにローンテニス旅行を行い、5 月には東京高等師範主催で高商、帝大などの参加による最初の連合テニス大会を東京高等師範のコートで開催し、以後定期化をみている。高商戦以後に定期化した対抗戦は、慶應、早大との試合である。4 校の対抗戦は注目の的であった。一方、1904 (明治 37) 年にローンテニス部は庭球部と改称された。同年には飯河道雄らが活躍し、無敗を誇った記念すべき年であった<sup>31</sup>。テニスの普及にも力が注がれ、1914 (大正 3) 年早大、高商と協力し全国中等学校庭球大会を開催した。

1920 (大正 9) 年より諸学校とともに硬球を採用した。軟式庭球は校内軟式庭球などにとどまりその復活は戦後であった。庭球部は一時不振であったが、この頃から復活の靨を呈し始める。また従来の東京商科大、早大等との対抗試合はこれを機に中止し、新たに諸学校との間に庭球リーグを組織しこれに参加することになった。1922 (大正 11) 年のリーグ戦では太田芳郎、古賀吉造、白髪文雄らが活躍し 2 位となった。1924 (大正 13) 年の日本庭球協会による選手ランクにおいて、シングルスでは太田、白髪がベストテンに名を連ねた。1925 (大正 14) 年には森勝勝が卒業した太田と組んで東日トーナメントで優勝し、明治神宮大会で準決勝まで勝ち進んだ。同年秋上記のリーグは廃止されたが、東京商科大との対抗試合を復活させた。1931 (昭和 6) 年頃から有力選手を輩出して、1935 (昭和 10) 年には四帝大主催の全国高専大会に優勝し、商大戦にも勝った<sup>32</sup>。

#### 6) 蹴球 (サッカー)

フットボールは 1873 (明治 6) 年、英国軍人ダ

グラス少佐によって築地海軍兵学寮に伝えられたとされている。1908 (明治 41) 年の『明治初期のフット・ボールの歴史』によると、1879 (明治 11) 年頃にリーランドによって「フートボール」が体操伝習所に伝えられたとされている<sup>33</sup>。しかしフットボールが東京高師にはっきりと「フートボール」部として登場するのは 1896 (明治 29) 年である。初代部長は坪井であった。また 1898 (明治 31) 年に行われた運動会では「フートボール」がプログラムに据えられていた<sup>34</sup>。しかしながら、その本格的な組織化はやはり 1902 (明治 35) 年の坪井の帰国後であるといつてよいであろう。同年の運動会では予科中組対修身体操専修科、予科二組対両組という二つのフットボールが行われ、この時各 6 名ずつの選手が出たとされている。当時これを本格的に取り上げようとする人々が現れた。有元久五郎、中村覚之助などの当部の創設者達であった。1903 (明治 36) 年には横浜で外人アマチュアクラブに挑戦したが敗れた。この時の選手の数は 11 名になっている。同年には部員が『アソシエーションフットボール』と題する本を出版した。蹴球に関する本の嚆矢とされるこの本の出版はサッカーの普及に重要な貢献をした。1904 (明治 37) 年には寮対抗戦が行われ、またデハブラント先生の指導を受けた。以後こうした外国人チームとの試合を通じて技を研鑽し続ける一方で、東京高等師範の蹴球部は広島高等師範、埼玉師範など多方面にフットボール指導のために部員を派遣した。東京高等師範のフットボールは草創期に指導的役割を十全に果たした。1905 (明治 38) 年に部歌が作られ部としてのアイデンティティを築き上げた。翌年には最初の蹴球大会が開催された。東京高等師範で発達を遂げたフットボールは部員達によって全国の中学校や師範学校に広められていった。

大正期に入って、1917 (大正 6) 年第 3 回極東大会にわが国最初の代表チームに竹内広、佐々木守らを主力とした高師チームが推挙され、先進国であるフィリピン・中国に敗れたが、国内に大きな刺激を与えた。1924 年の第 5 回極東選手権大会も東京高等師範チームが主力をなした。1924 年には、蹴球部が全国中等学校蹴球大会を開催し、1925 年には東都大学リーグの第一回リーグで優勝した。竹内虎士などがそのメンバーであった。ところが、東京高等師範の蹴球部員の努力でフットボールが

普及して地方の中学校でも盛んに行われるようになるにつれて、東京高等師範のフットボールは次第に私大に押される羽目になった。中等学校大会を日本蹴球協会に返還後、チーム力が低下したが、1936（昭和11）年頃から再び上向き、翌年には国内のチームを破り、決勝で朝鮮チームと対戦するまでに強くなった。当時主力となった松永（体甲、昭和14年卒）は第11回オリンピック選手に選ばれた<sup>35</sup>。

#### 7) 野球

1902（明治35）年に紅白試合を行ったのが東京高等師範の記録に残る最初の野球試合であった。創立時にはベースボール部として発足し、翌年より野球部と改称している<sup>36</sup>。当時の部長は坪井であった。1906（明治39）年春には本科1年対本科2年の試合が行われ、秋には予科対本科1年の対戦が行われた。校内の対戦が競技化されるに伴い対外試合の要望が強まり、1908（明治41）年に実現した。春に青山師範と対戦し初の対外試合に勝利し、同秋、埼玉師範にも勝利した。翌年以後学習院と定期的に春秋2回の試合をした。翌年千葉北條で夏期合宿を行った。1911（明治44）年には学習院補習科を下した。これは東京高等師範野球部が他の高等専門学校と戦って勝利をおさめた最初の記録である<sup>37</sup>。

大正期は野球部の基礎固めをするとともに、次第に多くなる対外試合にも励んだ。1915（大正4）年に体育科がおかれたことも重視しなければならない。体育科では陸上競技等華やかに活躍している部に入る者が大部分であったが、たまには野球部に入る者もあり、彼等は運動神経が優れており野球部の中堅になった。

1918（大正7）年には黒河内など優秀な新人が入って活気づき大正中期の黄金時代を作り出した。大正末期は不振であった野球部も昭和に入って優秀な選手が続々入部して活発を呈した。1927（昭和2）年には対抗試合を始めて以来殆ど勝つことのできなかつた学習院を破った。1931（昭和6）年には小石川にある文理大、拓大、東洋大で3大学リーグを結成した。翌年には対広島文理定期戦が始まった。以後もリーグ戦、全国高専大会、定期戦などが毎年行われたが、中心は広島戦であった。

#### 8) 短艇（ボート）

短艇部史において、小林用三郎は「運動部中、

短艇部は其創設の歴史最も古く」と記している。「短艇部沿革略誌」には茗溪、昌平という2艇が「常に墨江に遊曳して雄を高等学校、高等商業学校と争ひ、3校鼎立して以て江上の覇権を振ひたり」とされている。この2艇は山川校長が1982（明治15）年に「校風発揚の一策として此二新艇を製造せられた」といわれ、東京大学が競漕を申し込んだが相手にならなかったと言われる。短艇部の活動が組織化され始めたのは1902（明治35）年からであった。5月19日、親睦会が開催された折りに第1回水上運動会が催され、5月26日の談話会で、新艇の建造が決議された。建造された3艇には曙、雷、隼の名が与えられ、10月に進水式、大競漕会が催された。同年冬期休暇には銚子往復の冬季遠漕が初めて行われた。1903（明治36）年から毎年4月に水上大運動会を催すことになった。以後、この春の水上大運動会に加えて、秋季競漕会が設けられ、定期化された。一方、学内での短艇部の活動が活発化するに伴い、対外競技を模索するようになった。1904（明治37）年の第4回水上大運動会では慶應義塾を来賓競漕に招待し、翌週には高師が慶應義塾の競漕会に出漕し、交流を深めていく。初期に繋がり深い他の学校は台湾協会専門学校、明治学院などであった。水上運動会は大正に入ってから春季1回とし、墨田川言問上流あるいは荒川艇庫前を会場とした。

短艇は従来固定席艇を用いていたのであるが、その後逐次滑艇席が使用される機運に至り、東京高等師範短艇部もまたこれを採用した。1921（大正10）年以来毎秋墨田川におけるレガッタに参加して、1926（大正15）年のレースでは予選、準決勝を勝ち抜いたが、決勝で帝大に敗れた。当時監督は田中義雄、主将は山浦新治であった。1928（昭和3）年、アムステルダム・オリンピック大会に短艇部選手濱田義明が選ばれ、その競技に参加した。昭和4年尾久で開催された関東大学専門学校端艇競漕では商大に敗れたが、昭和5年東京高等師範、拓大、工大との第1回三大学リーグに優勝した<sup>38</sup>。

#### 9) 游泳（水泳）

游泳部は1902（明治35）年に誕生した。同年7月に玉置省吾らは游泳部を設立し、約60名の同志と鏡浦で游泳を実施し、游泳部の基礎を築いた<sup>39</sup>。翌年には期間が2週間から2カ月に延長された。この時には3里遠泳進級制度の形式が導入され、

また修身体操専修科の参加、安房中生徒への指導などが行われた。当時の水泳師範は神伝流の上田盛弼であった。1904（明治37）年には師範中野次郎が神伝流、水府流等の諸流派の泳法から、扇横泳一段、片抜手扇横泳一段等で知られる高師泳法の教程を創始した。高師泳法は本多存師範によって大成されていく。この頃に佐藤富三郎作詞、神保格作曲による水泳部歌が作られた。1905（明治38）年予科生は毎年校命により水泳を行うことになった。この年から3里遠泳、5里遠泳などが行われ、1906（明治39）年には游泳のための寄宿舎が北條に完成した。この頃から東京高等師範の指導性が発揮されていく。東京高等師範と一高との主催で関東連合游泳大会が当地で開催される一方、水泳部員は水泳教師として多くの中学校等に派遣された。

極東選手権大会には東京大会に4名、マニラ大会に3名の代表選手を出すまでになった。この黄金期には、斎藤兼吉、海後勝男、宮畑虎彦らが活躍し、斎藤は1920年のアントワープオリンピック大会に、宮畑は1924年のパリオリンピック大会に派遣された。1929（昭和4）年の校友会誌では、游泳部に代わって水泳部という名称が用いられている。1933（昭和8）年には、帝大、國學院に代わって一部に昇格し、1935（昭和10）年には関東学生水上競技大会で3位に入るなど活躍した。

#### 10) 籠球（バスケットボール）

1928（昭和3）年の校友会誌第85号によると、籠球部は、1927（昭和2）年4月の評議員会議において校友会運動部の一部として公式に認められた。同年5月に成城高等学校において慶應大学チームと最初の試合を行い勝利をおさめた。同月には、立教大学主将、佐藤をコーチに迎え、以後1学期には成城大学、立教大学、明治大学、商大専門部と対戦している。10月には神宮予選の皮切りとなる籠球関東予選に出場したが、帝大に敗れた。同月には籠球の普及を目的とし、第1回校内大会を実施した。1928（昭和3）年関東地方の専門学校籠球部の連盟を組織しようと企て、9月にその成立をみた。リーグ戦には昭和5年度、8年度、9年度に優勝している。1935（昭和10）年には野村、石山、小澤の3名が全米軍と対戦する全日本学生選手に選ばれた<sup>40</sup>。

#### 11) 卓球

『筑波大学卓球部 五十周年記念誌』によると、

わが国において卓球は、1902（明治35）年高師坪井玄道教授がイギリスからラケット、ボール、ネットなどの用具を買入れて帰国し、東京の美満津商店に依頼し、卓球用具を試作させたのを契機に、全国に普及した。この頃、東京高師において卓球を行った学生が卒業後教師となり、地方の赴任先で卓球の普及を試みたと思われる<sup>41</sup>。日本中に広がった卓球であったが、東京高師ではスポーツとしての卓球は盛んではなかった。東京高師の名前が最初に出てくるのは、1924（大正13）年秋全関東学生卓球連盟の秋季リーグ戦においてである。公認の運動部として正式にスタートするのは1930年からである。創部には横式信義らが尽力した。全関東学生卓球連盟三部に所属していた卓球部は、1934（昭和9）年坂井英一が入学し、その競技力を急速に向上させた。1937（昭和12）年秋には二部で優勝し、1938年春、1941年秋には一部を経験している。

#### 12) 排球（バレーボール）

1921（大正10）年、第5回極東大会へ派遣する代表選考の試合をするため同年4月に行った東京基督教青年会及び横浜基督教青年会との対戦が東京高等師範の最初の記録である<sup>43</sup>。公認の運動部としてのスタートは1933（昭和8）年であった。設立時、初代部長は寺澤巖男、主将は小倉胤雄で、関東排球連盟に加盟して秋のリーグ戦から参加した。二部からスタートしたが、東京帝大との合同合宿などで実力をつけ、1934（昭和9）年の秋季リーグでは優勝決定戦に勝ち一部に昇格した。連盟の改組に伴い、1936（昭和11）年からは関東大学排球連盟に参加し、同年には帝大との定期戦（後に東京商大が加わって三官立大学定期戦となる）を開始させた。関東選手権大会、明治神宮大会予選がその他の主な試合であった。

#### 13) 送球（ハンドボール）

留学していた大谷武一が、ドイツでハンドボールに接し、帰国後高師の教官となり、1922（大正11）年7月、大日本体育学会の「体育科夏季講習会」で「ハンドボール」を初めて紹介した。1938（昭和13）年ハンドボールの規則を翻訳し「日本送球競技規則」を完成させたのは東京高等師範出身の阿部二郎であった<sup>44</sup>。送球部が運動部として正式に認められたことを記す史料は見あたらないが、1937（昭和12）年わが国初の公式試合である第1回関東選手権には文理大の名で出場している。

当時はハンドボール部の単独チームはできず、各クラブのシーズンオフの選手を集めた混成チームであった。同年の第1回全日本選手権大会には、大塚クラブとして出場し優勝した。的場益雄らがそのメンバーであった。幻の東京オリンピックのハンドボール候補選手には、大津賀伝芳らが選ばれている。翌年5月から6月の第1回東京学生リーグにも優勝した。しかし、その年の秋季リーグから、混成チームでは勝つことが困難になり始めた。

14) 体操

1901(明治34)年の校友会結成時に器械体操部として名を連ねているが、2年後には校友会から排除されてしまう。体操部が組織化され始めるのは大正末期であると思われる。当時の体操部の名簿には今村嘉雄(昭和2年卒) 本間茂雄(昭和2

年卒、第10回オリンピックロサンゼルス大会に参加)などの名が記されており、以後も部員数が増加していった。けれども当時の体操部は学校体操の研究的色彩が強く、競技化を志向してはなかった。1936年の第11回オリンピック(ベルリン大会)には、高師関係者では遠山喜一郎、松延博、本間茂雄(コーチ)が参加した。高師体操部が本格的に競技化を志向し始めるのはベルリン大会参加後のことであった。

・東京高等師範学校の卒業論文

本研究を進める過程で、昭和22年度から昭和26年度までの卒業論文を発見することができた。それらの論文題目と氏名は表5の通りである。

表5 東京高等師範学校卒業論文一覧(昭和22年度～昭和26年度)

(昭和22年度卒業)	
「送球」の攻撃論と防禦論	井上 清
野球の理念と理論	井波 廉三
児童心身の発達に就いて	倉田(北村) 純
体育に及ぼす経済的影響	剣持 正和
歩くこと	近藤 榮三
野球に於けるコーチと攻撃作戦	中山 守
陸上競技練習の理論と實際	細井 操
器械体操の解説	森 主税
體育指導の要衝	澤柳 保夫
人體と營養	田口 忠利
身長の測定意義とその方法	平岩 二三夫
砲丸投練習法	中村 正壽
體育實踐の具體相	興梠 勝吉
Sprintingに於けるStartの一考察	世良 勉
相撲指導論	遠藤 宥範
運動能力上より見たる 農村児童の体育	岡島 宣八
疲労判定ノ為實施スベキ体力検査 - 心配係數 -	小長井 清
スキー長距離競争の技術	西中 良夫
運動能力検査の試み - 単一跳躍と運動速度 -	清水 正彦
Niels Bukhの“Grund Gymnastik”を繞って体操を論ず	西山 常夫
バスケットボールの心理的分析	野中 祐三夫
野球コーチ策戦論 別記(野球記録に於ける研究)	富永 隆
體育目標の一考察	奥名 宏源
日本体育私観	大村 芳弘
野球に於ける近代打撃術の解剖	伊藤 茂男
青年期の体育の場に於けるスランプ	島崎 旺
體育の倫理的價值	北原 磯治郎
人口動態の推移	篝 正義
合宿練習の身体に及ぼす影響に就いて	茂木 旦
排球技	淺野 勇
學校體育の社會化	坪井 三郎
送球競技の指導法及練習法	加藤 信明
運動の心理学的研究	旆原 亨
茨城縣下ニ於ケル中都市兒童体位ノ變遷	金塚 文男

身体と運動 ペスタロッチーの身體陶冶に就いて 関節の可動性について 學校に於ける結核豫防と保健教育 野球“その打撃と走塁” 地方教生実習を通して教育研究的批判と考察 年齢別体力標準 体力測定レポート「体育に於ける測定を巡っての一課題」 體育文化運動の方向 身體論 新しい球技に就て 近代オリンピックの發達史 Stroke and Finish 体育学概論 運動競技精神の發達及び効果 体育と生理的機能 鐵棒運動 陸上競技場の構築 競泳法の研究 社會体育論 排球の基礎 健康論 體育の目的 バレーボールの持つリズム及びメロディーに就いて 生物と環境 東京都練馬区開進第二中学校生徒の体格 統計 付「學校衛生」	牟田 清 飯塚 猛夫 市毛 種男 永井 勝雄 伊藤 友和 奈良 尹 松井 久男 伊藤 郁郎 上子 侃 早川 洋一 吉田 一夫 青田 宏三郎 八重島 香二 矢口 四郎 安齋 泰見 岩本 温親 佐々木 史朗 三善 信一 藤井 知至 森 要一 三木 定雄 小田川 鎮雄 増田 靖夫 北澤 忠 土内 清三 横尾 治躬
(昭和23年度)	
社會體育のリクリエーションに就いて ラグビープレイ考察 夜學生の体育 意志の教育に於ける意志の發達及び身体との連関 社會事業 司法少年保護団体 仁泉塾 “收容少年に就いて” 兒童の性格と体育 「神經質青少年にもとづく」内向型性格と體育運動 排球の綜合的技術と指導法 轉廻運動 排球競技の指導研究 肉体美と体育 体育科技能力との相關々係に就いて ヤーンの研究 球技に於ける人間形成について 體育の測定 - 身長及び体重と走幅跳及び砲丸投との相關々係 - 農村の体育 横浜市櫻岡小学校に於ける体力測定 水泳技術 体育と感情 人格主義的體育に於けるスキルの考察 國民體育の場の内部的形態 班別指導の重要性を論ず ラグビー・フットボールのスコアブック考案 レクリエーション 中学に於けるハンドボールと其の指導 興味の研究 排球の基礎技術について 団体的縄跳運動	北野 正夫 寺沢 健次 牧 巖 松村 守 田中 宗男 新津 金彌 森基 要 大内 朋雄 根本 義弘 和久津 秀男 稲垣 保彦 星野 義三 大塚 勇三 太田 尚充 松坂 弘康 谷村 辰巳 吉田 敏郎 鎌守 武磨 村井 義 五味 敏 樋口 正三 平野 弘海 谷村 辰巳 山崎 喜久 鈴木 静夫 松尾 昇 久保田 俊影 金井 夏樹

<p>吊環運動の概略と基礎的運動指導                      運動技巧の基礎的問題                      レクリエーション                      排球の歴史 - 技術の発達史に就いて -                      短距離疾走の考察                      プレイに於ける動機 ミッチェル                      ラグビー史                      體育と新制中学校                      徒手体操の理論的考察                      私の体験に依る球技指導法の實際に就て                      籠球競技の特異性について                      農村の體育                      送球指導法 - 高等學校・中學校の -                      跳箱運動 - 主として助走と踏切 -                      動態造形の技術                      リズム運動について                      野球                      各國のスポーツの特質と日本スポーツの在り方                      日本游泳術に就いて                      ハンマー投の研究</p>	<p>島谷 勲                      金子 巴                      土方 久平                      八亀 俊彦                      酒巻 昭二                      木下 廣之                      黒田 信寛                      愛敬 高輝                      古沢 慶造                      豊田 直平                      小澤 保                      吉田 尚悟                      安藤 重明                      畑岡 瑞夫                      日高 富士夫                      新川 和博                      田口 一男                      高杉 隆三                      瀨崎 嘉明                      吉武 勝之</p>
(昭和24年度)	
<p>バレーボールに於ける考察                      送球の理論と練習                      ニールスブック 基本体操の一考察                      舞踊の研究                      排球の前衛攻撃と指導法                      古代ギリシア体育史の一試考                      ゴールキーパー論                      中学校に於けるカリキュラム構成                      野球學                      ハンドボール                      身体發育過程の觀察態度                      日本に於ける野球の發達 - 大正・昭和篇 -                      中學校に於ける体育カリキュラムの構成について                      器械体操徒手・自由種目に就いて                      知的指数及び向性指数と正確投成績との相関關係について                      競走に必要な補助運動                      體育理論 今村教授                      スキー技術に於けるバックンの位置に就いて                      水泳の指導法                      體育の學習指導                      ラグビーに於けるフォワードプレイ                      フォワードのスクラムと動きについて                      野球的理論と實際                      體育現象の考察                      學校体育施設の實態                      球技に於ける社会的性格の育成                      コアカリキュラムと體育の關係                      水上スキーに就いて                      日本に於ける野球の發達 - 明治篇 -                      アメリカ體育の紹介 - Introductoin to Physical Educationより -                      體操の生活化</p>	<p>井上 英雄                      萩原 嘉輝                      名越 茂夫                      高野 卓哉                      小鹿野 友平                      山田 行道                      稲本 章                      都原 宗博                      濱 正                      岡村 昭二                      手島 知明                      山岸 博也                      徳田 有基                      黒沢 義                      吉田 久一郎                      望月 正                      伊東 光二                      江川 茂彦                      鈴木 祐一                      佐野 清次郎                      鶴巻 和男                      鶴巻 和男                      小鹿 一雄                      齋藤 定雄                      佐藤 照男                      高野 正友                      樋野 二郎                      久保 實                      山本 吉夫                      植草 榮                      山本 寛司</p>
(昭和25年度)	
<p>バレーボールに於ける中衛ライトのキルに就いて</p>	<p>箱崎 和雄</p>

策戦の場に於ける注意の問題 その心理的考察 学徒による体育研究会運営指導の一考察 ウィングスリークォーターの立場から見たラグビーフットボール ハンドボールの防禦 跳箱運動の指導方法 子供の遊びについての一考察 卒業論文 對外競技の一考察 孝生スポーツ 主事論 卒業論文 野球コーチ論 なわとび運動價值と学年別種類の考察 中等体育カリキュラムの作成 体育指導者の行うべき健康管理 水球競技 世界舞踊史 西洋舞踊と比較せる徒手体操について 器械体操に於ける振動の發展 スポーツマンの性格 類型的に見た近代スポーツと日本スポーツの一方 鉄槌投に就いて バスケットボールのピボットとドリブルに就いて ギリシャ競技についての一試察 身体異常児の矯正について 能力敏捷性測定と測定の必要性 強健体への育成について 一般健康者を対象として 近世我が國の球技の占めた位置 初期のバスケットボール バレーボールの標準と評價	中村 幹夫 和泉 繁次 堤 治美 高橋 健夫 椎名利郎 菊地 欣一 マス・スジョン・ナルトジプトロ 梶原 清 本間 慎司 寶珠山 忠久 木下 匡弘 松本 善信 吉田 清計 池田 正徳 和田 米郎 鈴木 文夫 東 和夫 鍋谷 鉄巳 大淵 正雄、松本 正忠 新 一郎 松本 善信 矢崎 栄一 富山 清 大滝 文弘 高橋 博 大島 道夫 矢崎 太一 保科 旭 木村 高満
(昭和26年度)	
硬式及び軟式庭球の歴史 新潟縣に於ける児童の遊びの生活について 定時制高校に於ける体育と健康の管理 進歩の量率及び限度 スポーツに対する態度 體育と榮養 部活動に於ける卓球指導 健康と血液症状の比較について ラグビーの再検討 ハンドボールの防禦技術の研究 米國及び日本に於ける野球の史的考察 新教育に於ける諸要素と体育指導者の心構 女子籠球ルール改正に関する一考察 自然打法 スポーツの社會性 現代ラグビーフットボールの性格と英国々民性に就いての考察 女子スポーツの指導に関する一考察 体育指導に於ける興味を論ず 體育の教育的價值 レフリングについて - ラグビーフットボール競技規則解説 - 運動心理と感情教育 ハンドボール - フォワード編 - 短距離に於けるスタートに就いて 水泳の身体的考察とその管理 女子スポーツに対する家庭の世論調査 - 特にバスケットボール -	福井 守久 渡辺 勇夫 猿谷 九龍 山田 龍夫 三浦 富也 石橋 勲 佐藤 泰夫 津村 欣司 高原 忠俊 北村 虎雄 石原 乙彦 加藤 義孝 鈴木 純也 大塚 一政 山田 正則 鈴木 修一 田島 更一郎 清水 博夫 加室 一臣 忽那 凱樹 川本 茂 澤田 賢昭 中島 健 石塚 武彦 本吉 忠

体育の測定と相関関係について  
 テスト種目としての懸垂運動の吟味 - 新制中学校対象 -  
 ラグビーに於けるフォワードプレイについての一考察  
 軟式庭球に於けるBack - Hand - StrokeのDriveについての一考察  
 身体虚弱児童における体育指導の考察

永良 寛  
 中澤 卓夫  
 冷牟田 健吾  
 関根 孝雄  
 遠藤 太賀司

注

- 1 文部省令第 11 号「高等師範学校規程」官報、第 3227 号、1894.4.6.
- 2 「高等師範学校規則」、高等師範学校一覧、自明治二十七年四月至明治二十八年三月。
- 3 創立六十年、東京文科大学、1931、pp.49-52.
- 4 高等師範学校一覧、自明治三十二年 4 月至明治三十三年三月、pp.93-95.
- 5 高等師範学校一覧、自明治三十三年四月至明治三十四年三月、pp.84-86.
- 6 同上、pp.87-88.
- 7 高等師範学校一覧、自明治三十五年四月至明治三十六年三月、pp.102-103.
- 8 高等師範学校一覧、自明治三十九年四月至明治四十年三月、pp.97-98.
- 9 高等師範学校一覧、自大正二年四月至大正三年三月、p.89. 同、自大正三年四月至大正四年三月、p.86.
- 10 「中学校令施行規則」、官報、1911 年 7 月 31 日付。
- 11 井上一夫、学校体育制度史・増補版、大修館書店、1970 年、p.74.
- 12 文部省令第 4 号、官報、第 766 号、1915.2.23.
- 13 東京高等師範学校一覧、自大正四年四月至大正五年三月、pp.22 / 1-24、1915.
- 14 同上、p.9. 24 / 1-25 / 4.
- 15 文部省令第 10 号、官報第 2567 号、1921.2.18.
- 16 東京高等師範学校一覧、自大正十年四月至大正十一年三月、1921.
- 17 東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧、自昭和二年四月至昭和三年三月、1927.
- 18 東京文科大学・東京高等師範学校・第一臨時教員養成所一覧、昭和七年度、1932.
- 19 同上、昭和十五年度、1941.
- 20 前掲 3、創立六十年、p.398.
- 21 東京高等師範学校沿革略志、東京高等師範学校、1911、p.51.
- 22 校友会誌、第 29 号「東京高等師範創立四十年記念校友会発展史」、1911、pp.50-51.
- 23 東京高等師範学校柔道部史刊行会、東京高等師範学校柔道部史、ぎょうせい、1987、pp.3-5.
- 24 前掲 3、創立六十年、p.420.
- 25 前掲 22、「東京高等師範創立四十年記念校友会発展史」、p.64-65.
- 26 鈴木博雄、東京教育大学百年史、図書文化社、1978、p.708.
- 27 校友会誌、第 31 号、1912、p.59.
- 28 大塚学友会会報、第 42 号、1935、p.3.
- 29 前掲、創立六十年、p.409-411.
- 30 安藤基平、東京高等師範学校庭球沿革史、1914、p.14.
- 31 茗溪軟庭百周年記念事業実行委員会編、茗溪軟式庭球百年史、1988、p.36.
- 32 大塚学友会会報、第 46 号、1935、p.21.
- 33 前掲 26、東京教育大学百年史、p.730.
- 34 東京茗溪会雑誌、190 号、1898、p.62.
- 35 東京教育大学サッカー一部編、東京教育大学サッカー一部史、1974、pp.26-30.
- 36 校友会誌、第 5 号、1894、p.182.
- 37 上里美須丸・東京教育大学野球部後援会、茗溪野球史、1977、p.321.
- 38 大塚学友会会報、第 7 号、1931、p.4.
- 39 前掲 3、創立六十年、p.406.
- 40 大塚学友会会報、第 46 号、1935、p.3.
- 41 筑波大学卓球部創立五十周年記念行事実行委員会編、筑波大学卓球部五十周年記念誌、1980、p.233.
- 42 筑波大学バレーボール部創立五十周年記念誌編集委員会編、醒めて立て - 茗溪バレー五十年 - 、1985、p.362.
- 43 大塚学友会会報、第 28 号、1933、p.3.
- 44 茗球会、茗球五十年史、1990、p.15.